

BOOKS

備酒伸彦(著)

地域ケアを見直そう

村中峯子

国際医療福祉大学大学院医療福祉学研究科保健医療学専攻 1年

手強くも読みやすい, ツボを押えたお宝ケアマニュアル

読みやすい本である。まず表紙の写真が良い。笑顔に溢れたお年寄りに囲まれて、ひときわ弾ける笑顔の著者が、読者を誘う。

しかし大学院とは、物事をクリティカルに見る鍛錬の場であることを、入学して知った。あら探しをすることではない。「論理的で偏りのない良質な思考」で、自らも考えることである。何を読んでも「すごい!」と、脳天気読書派だった私には、結構、シンドイ。

ここは、何事も経験。クリティカルにこの本にチャレンジをする。たちまち、額に脂汗が浮かんでくる。手強い本である。論理のバランスといい、説得力があり過ぎる。気が付けば、額くばかりの自分がある。

少し紹介してみよう。本書は全117ページ。活字が大きく、写真も多いのですぐに読み終える。まずそうした意味で、満足感を与えてくれる本である。

2部構成を呈し、第1部で著者は、われわれが描く高齢者像が、実はこ



●B5判, 128 ページ

定価: 本体 2,000 円+税
医学書院 (Tel.03-3817-5667)

ちら側がいかに勝手に思いこんだ産物であるかを説く。そのわれわれの思いこみに高齢者が付きあい、いかに弱い老人を演じているかについて、好きなテレビ番組、お金の使い方などの調査結果などで証明する。これまでの価値観を覆される感触が、読んでいて気持ちいい。

第2部では、ケアスタッフが「冷たい頭と、暖かな手」をもちつづけるための、さまざまな示唆が展開される。カンファレンスとは、何をどう話し合うものなのか。リハビリは、どんな意味をもつのか。スタッフに求められる姿勢とは何か。プライドとメンツの違

い、相手に物事を伝えるのに必要なスキルは何かなど、事例たっぷりのお宝知識満載。

正直、これはもうマニュアル本である。新人教育にも現任教育にも、それぞれのレベルで使えるそれである。

「捨て目」というコーナーは、著者の人間観が伝わる読み物になっており、これがまたツボを押さえている。なぜなら、「ケア」するときに忘れてならないのは、人間をどう見るのか、ケアの仕事を自己のなかで、どう昇華していくのかということが、至極大切なことだと私は思うからだ。

通読し終えて、メイヤロフの「ケアの本質」を思い出した。メイヤロフは「ケアを通して、ケアする人が自分自身の生の真の意味を生きるのだ」としていた。

本書を手にしたわれわれにも、その可能性が等しく用意されていることを、心に留めて読みたい本である。